辰巳会京都全国大会

（編集室記）

時・昭和41年5月10日
於・京都天竜寺

「素抱深情」去る五月十日（火曜日）数年振りの京都大会を洛西の古刹禅の庭園で有名である嵯峨天竜寺本坊を会場に企画したるところ、金石の交り諸兄のお精進も快調五月晴と申すより辰巳会晴と云いたい雲一つない春陽に恵まれた。新緑に膨れた嵯峨一帯のふるき山々の美観は何ものにも例えようがない。懐旧談を愉み旧友を暴いてはるばる全国（東京、中部、阪神、四国、西日本）から続々と馳せ参ぜらる。京都駅及び四条大宮から出迎えのバスに便乗された会員合わせ一七五名喜悦に充ちた面々玄関受付けに到着、各自署名会費納入等の手続きに屢し思わぬ混雑を呈した。殆んどが打ち揃い開会を竣つ憩のひと時を祇園銘菓の老舗鍵善から出張の名物「くず切り」を荒尾窯黒釉の鉢で運ばれ一同賞味することになった。第一会場に当てられ書院の広間には辰の大暖簾がいかめしく掲げられ会場のムードが一段と高まった事が愉しい。やがて十河幹事に依って大会の火蓋が切られた。論語にある友遠方より来る亦楽しからずトンネルを通って門司の河豚の宿にてささやかに歓迎会を開いた。当日木村支部長より本部の要望に依り幹事の増員を計られた。

（米倉記）

◎昼食の精進料理に舌鼓をうつ皆さん方

辰の有りし日の会社工場の想出を語り合い、渋沢倉庫見学、源平の古戦場壇の浦、安徳天皇、耳なし芳一で有名な赤間宮、日清講和の春帆楼、等の史績を一巡し関門やとも云いたい感激の拍手鳴りも止まず。続いて小野幹事の開会の辞は切々身に迫る情熱の弁舌に独り襟を正さざるを得なかった。次にお元気になられた高畑会長の挨拶はいつもながら大愛精神溢るるばかり共に今後共充分自愛して天寿を全うしようと強調された。これに附言して今回栄誉の叙勲の内御出席の勲三等瑞宝章東条順吉氏、同じく森本準一氏に対し御功績に対する祝辞が詳さに述べられた。漸時両氏共感慨無量、紅潮した面ざしの童顔が碇び出た。例に依って柳田陽子嬢から花束が捧げられ異口同音又拍手の渦が巻き起った。最後に両所からいとも鄭重なる謝辞に接した。かくする内午前中のプログラムが終り、方丈廊下に出て何段かに整列して記念の写真を撮る。美しい庭園の緑が一同の瞳に反映した。撮影が終って第二会場、方丈の大広間に座を移しかえた。用意された朱塗りのお膳に配られた山内の珍らしい精進料理、各々箸を執り舌鼓を打ちながら老を忘れてのぞめき幸なる一日なりと誰もが叫んだ。「軍酒山門に入るを禁ずる」山内の掟今日も酷しく余儀なく幹事の気転で長寿の薬水少量を廻わした。これには嬉しい爆笑が隅々に響いた。時を見はからった十河幹事やおら立ち物故社員への哀悼の黙禱を捧げ会務として出席されている各幹事の紹介、今回の叙勲者名、最近の物故者の通知等に附け加え、運営して来た数々の経過と最も申し難い現在の会の資金の窮迫を赤裸々に訴えて、今後のファンドに対する諸兄の反省を促したが十河幹事の眼頭には露が光っていた。

話は前後し恐入るが、昨年来刊行の文学界に連載の城山三郎氏の「鼠」遂に今回美しい単行本として文芸春秋社から出版されたのを切掛けに、東京西川幹事が著者城山三郎氏を連れて大会に招じた。全く縁なき衆生であるべき彼が茲に計らずも長日月を費し鈴木の取材に東奔西走、確たる裏附ける全貌の悉くを綿密なる調査のもとに編されたことに感銘の謝意を表したい。又会場における彼の談はその著作の裏話とも云うべきもので、ポツリポツリと吐かれたが飾り気のない性格の持主であることに敬服した。会場温故知新の雰囲気にも時の制圧に余儀なく三時天竜寺を退場、待機のバス四台に分乗スケジュールの最後の圧巻西山ドライヴウェー一一キロを踏破することに出発した。銀色に蛇行する嵐山、清滝口のゲートから高い愛宕山をバス窓から右から左へと眺めつつ一衣帯水、保津川の舟下りを見おろし、藤緑に包まれた渓谷の自然美は形容のことばも出ない。行き届いたバスガールの説明を聞きながら徐々に曲り登ってゆく。展望台を通過して紺壁の菖蒲池に停車、三十分間自由休憩、右往左往の散策中山を売るとか売らんとか話題にのぼっている仁和寺の三峰もそばにはっきり見える。見晴万点の千年の都大路も近代ビルの乱立と共に時代の移りかわりには驚嘆の声を放った。再び乗車した一行は高尾口ゲートの手前レストハウスへ向う。全コースが公園とパノラマのように拡かってゆく景も捨て難い。レストハウスで車を停めて再び憩う。清滝川の上流沿いに神護寺の塔がそびえ立ち、高山寺も新緑の中にかすかに見えている。有名なる北山杉の自然林は麝葱として見逃がせない風物である。レストハウスで最後の懐旧の名残りをとどめバス乗車、高尾口のゲートを抜け周山街道を蕪地、仁和寺の山門から四条祗園の三叉路へと馳る。一力茶屋の赤屏の見えたところで下車大成功の辰巳会を一同祝福し、仕上りホコホコの記念写真を銘々手にして惜しくも再会を約し、大団圓となる

幸に以て厨は青し暖簾の彩

辰巳会役員表

（イロハ順）

会長 高畑誠一
〈本部〉
幹事 今村冬二郎　益子史郎
今村頼吉　山成卓爾
小川実三郎　宮三要
小倉五郎　高尾定枝
小野三郎
木畑竜治郎
沢村亮一
十河一正
橋本隆正
畑薫
福田秀吉
松岡俊一
柳田義一
米田幸吉
松下重男
前田艶子
〈東京支部〉
幹事代表 西川政一
幹事 河合一雄
楠本直美
小島実
斉藤虎吉
坂本寿
住田正一
鈴木丸衛
田代義雄
古川清行
世話役
〈中部支部〉
支部長 秋元鷹男
幹事 伊藤庄次
竹下富士松
伏見俊助
〈四国支部〉
幹事代表 東条順吉（高知）
小松豊秀（〃）
小栗正（高知）
上久保秀樹（〃）
刈谷勇馬（〃）
沢井秀男（〃）
鈴木安一（香川）
竹崎浅吉（高知）
伊達信吉（愛媛）
藤江清治（〃）
〈西日本支部〉
幹事代表 木村悌蔵
幹事 松本通
松本得一
森本兎之助
米倉勇
滝上弁次
小樋井正夫
西茂

句碑「花火師」建立に際して

（柳田生）

将に馬齢を重ねんとする新春を前にしてわが敬愛せる親友の一人である阪神電車岩屋停留所に近い学校法人小倉育英会々長小倉大三郎さん（神鋼社員子弟養成）が特に僕のために「花火師は花火打ち上げ天を見ず」の句碑を同園入口にどっかりと据えて下さった。

碑の高さ七五センチメートル、幅九〇センチメートル、態々現地から運んで来られた小豆島の自然石で大阪城を思わす石の色艶加えて田甫重孝さんの鑿の妙技は驚くばかり句を鮮かに浮き出すことが出来た。

晴天の霹靂とはこんな事を云うのであろうかとこの句碑に対する感銘は烈しく胸を打って止まない。

去る十一月二十七日の晩、突然小倉さんから電話がかかり「出来たぞ、出来たぞ」と御機嫌斜ならざる電話の報せには受話機を握ったまま僕は屢し嬉しさと恥かしさとでしやちこばった。

思い出はこれより先、神戸史談会十月例会、網干斑鳩寺で小倉さんと顔を会わした時であった。僕の肩を叩いて云われるに「従来俳聖と云われる芭蕉にしろ一茶、蕪村らにしろ各地にこれらの句碑はあるにしろ、殆ど総べてが故人になってからの出現で作者の眼で見た句碑は一つもないことが最も歎わしい。幸にして僕の真近には君のような恆に馬鹿に嫌われ口を叩いては盛んに迷句を吐いている輩があるからには是非共君の句碑を建てて見たい」と冗談のように云っておられたのが一月足らずでこんな急スピードでわが句碑が現実にわが眼に現われようとは神ならぬ身の知るよしもなく吃驚仰天した。

僕は翌二十八日早速車を飛ばして同園を訪れ、わが句碑に初対面をしたが忽ちこれに威圧された僕は思わず石にしっかり抱きついた。その頃相僧く小倉さんはお出掛けで留守をしておられたので老母堂に心からなる喜びを伝えすたすたと門を出た。数歩してから再び句碑を振り返って見るとその側にやさしくも白く咲き誇る山茶花が一層この碑を明るいものにしていることに気がついた。…でも何と云っても小倉さんの和かな心使いのほどもしみじみと忍ばれては幾度も心の底から感謝がほとばしってくる。

念願でもなかったことが念願をつくり、石から火を発するような僕への美挙、即ち永遠の贈りものに対してこれに酬ゆるには益々句作をつづけるのは勿論のこと、最良の日の喜びを絶えず忘れず人生の好侶伴とも云うべき小倉さんの面目に賭けても益々人間愛に燃えて何かにつけ御世話の出来る限りの事を尽して行きたい事を茲に誓いたい。

ものすさまじ句碑建つ　義一
山茶花蕾咲く
四〇・一一・三〇記